

新聞記事から地域に目を向け、自らを表現する教育の実践

Part 1

～情報を自分の目で確かめ、それをもとに思考し、自らの言葉で発信する～

関根学園高等学校

1 学校の概要

関根学園高等学校は明治42年（1909年）に関根萬司先生によって旧高田市に私立女子技芸専修学校として設立された。その後、昭和37年（1962年）に男子部が設置され、それに伴い高田北辰高等学校と改称した。現在の校名となったのは昭和53年（1978年）であり、今年創設109年を迎える伝統ある学校である。

本校の建学の精神は「輝いて生きる」であり、生徒一人ひとりが学業においても部活動においても学外の活動においても、生き生きと活動している。本校は、新潟県の「魅力ある私立学校づくり支援事業」に指定されており、スキー部・野球部・陸上競技部（駅伝）を中心として部活動が盛んである。

また、本校は「生徒一人ひとりを大切に」をモットーとし、保護者と連携して生徒を「共」に「育」てる「共育」を合い言葉とし、40年以上前から毎年全戸家庭訪問を実施している。

2 NIE実践のねらい

- (1) 日本および世界で起きた社会問題に目を向けさせ、視野を広げさせる。
- (2) 社会問題の背景を捉えさせ、自らの考え（意見）を持たせる。
- (3) 自らの考え（意見）をSNS（Facebook：Weekly Sekine）上に投稿（発信）することで、自らの発言（発信）に責任を持つことの大切さを育ませる。
- (4) 他者が発信した記事や閲覧者からのコメントから、自分とは違う価値観や視点があることに気付かせ、他者理解の精神を育ませる。
- (5) 取り上げた社会問題を上越地域と関連づけ、フィールドワークを行うことによって上越地域の実態を知り考察し、まとめたものを発信する。

3 本年度実践の概要や実践内容

(1) 実践の概要（経過）

時 期	実 施 内 容
平成29年1月23日	○ NIE実践打ち合わせ 新潟県NIE推進協議会 土屋 修 事務局長
平成29年4月	○ NIE実践計画提案
平成29年4月21日	○ NIE推進協議会
平成29年5月18日	○ NIE校内研修会 新潟県立高田南城高等学校通信制課程 教頭 五十嵐 雅樹 様
平成29年5月28日	○ Weelky Sekine 投稿（Aグループ）
平成29年6月 4日	○ Weelky Sekine 投稿（Bグループ）
平成29年6月11日	○ Weelky Sekine 投稿（Cグループ）
平成29年6月13日	○ NIE研修会 新潟日報上越支社 報道部記者 白倉 麻子 様
平成29年6月18日	○ Weelky Sekine 投稿（Dグループ）
平成29年6月25日	○ Weelky Sekine 投稿（Eグループ）
平成29年7月 9日	○ Weelky Sekine 投稿（Fグループ）
平成29年7月18日	○ NIE校内研究発表会 指導者 新潟県NIE推進協議会 伊藤 充 会長 新潟県NIE推進協議会 土屋 修 事務局長
平成29年7月	○ 各グループ，発表に向けた Field Work 実施

(2) 実践内容

① 実践クラス 3年6組 (男子17名女子20名・特別編成クラス)

② 具体的な取り組み

ア NIEの取り組みにあたり、文章を生徒に配布し、NIEに取り組む意義を伝え、関心を持たせた。

イ Facebook に投稿させる取り組みのため、個人情報の流出を防ぐ方法、事前に差別的な表現、ヘイトスピーチなどについての学習を行った。

a 上記を徹底するため、Facebookに投稿する前に担当教諭に投稿内容をメールで送り、チェックを受けた上で投稿することを行った。

b 生徒の個人情報流出を防ぐため、ログインの際は Weekly Sekine のアカウントを使用するとともに、個人名での投稿および書き込みは禁止とした。

ウ 投稿する際は以下の形式を用いることで統一した。

a 取り上げた記事の記載 (新聞名および日付を記載する)

b その記事を取り上げた理由

c 新聞に取り上げられた記事の背景

d 自らの考え・主張

e 新聞の見出しの写真

エ 7月に入ってから各グループで1つの記事を取り上げ、その記事を上越地域と関連づけフィールドワークを行い、上越の実態を調査し、グループで考察し、それをまとめたものを7月18日(火)の校内発表会で発表した。

4 実践例

(1) Face book [Weekly Sekine] への投稿

この取り組みは前述のとおり「生徒が自身の視野を広げること」「生徒が自らの意見に責任を持つこと」の2点に重点を置いたが、実はもう1点あった。

それは「起こった事象(社会問題)の原因を推論(推測)し、その推論(推測)を基に自分なりの考えを導き出す力を育む」というものである。

これから生徒たちが生きていく世界は多様な価値観に溢れている。そして、そこは

必ずしも「一つの正解」が存在する世界ではない。そのような世界を生き抜いていくためには、今日の前で起こっている現象事象を正確に捉え、様々な視座から推論（推測）し、自分なりの考えを導き出す能力（インプットからアウトプットへ）が求められる。（現に2020年度から実施される「大学入学共通テスト」では、各教科でこの能力が求められている）

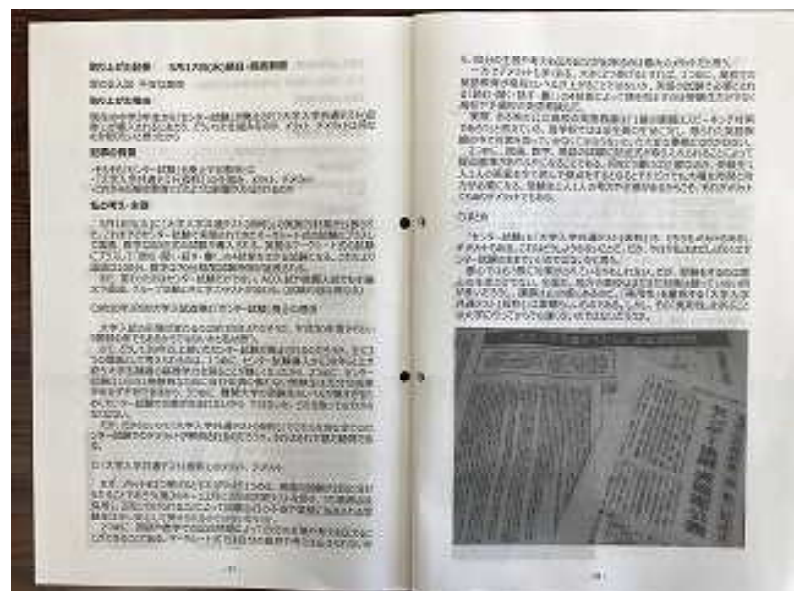
しかし、生徒の実態は「自分の好きなこと（興味関心があること）の知識」だけを蓄積しているように感じる。新聞を読むことにより、今まで興味や関心がなかったこと（現象）を知ることが、これからの世界を生き抜く能力を身につける第一歩と考え、実践に取り組んだ。

結果として、この実践に取り組んだことにより、生徒たちはさまざまなことに興味関心を抱くようになり、そして様々な事象に対し「なぜ？」という疑問を持つようになったと感じられた。（言うまでもなく「なぜ？」は知的好奇心の萌芽である。）

実際に Face book への投稿記事を見ても、取り上げた記事から「なぜこのようなことが起きたのか」という疑問からスタートし、自分の推論をたて、自分なりの考えを導き出している生徒が多く見られた。

この知的好奇心の萌芽は学習にも好影響を及ぼした。以前であれば「わかりません。教えてください。」だった質問が、「どうして（なぜ）こうなるのですか。」という質問に変化してきたのである。この結果、飛躍的に成績が伸びた生徒も現れた。

「疑問」を抱き、「推論」をたて、「自分なりの考え」を導き出すという習慣を身につけさせる手段として NIE は有効な手段であると言えるだろう。



（２） 新聞記事から上越地域への関連づけの実践

この取り組みは、全国紙、地方紙に掲載された社会問題が上越市ではどうなのか、全国や新潟県と同様に問題となっているのか、つまり「上越 = 全国・新潟県」なのかを、自分（たち）の足を使い、自分（たち）の目で確かめることを目的とした。

この取り組みのキーワードは「自分（たち）」であるため、テーマ決めからスタートし、取材先へのアポイントメント、取材内容などすべて「自分（たち）」で行わせた。各グループのテーマ、取材先、取材内容は以下の表のとおりである。

○ 「高齢者の交通事故」について

取 材 先 : 上越警察署 交通課

取 材 内 容 : 高齢者による交通事故の記事が紙面に掲載されることが多くなったが、
上越の実態はどうなのかを取材。



○ 「救急車出動」について

取 材 先 : 上越消防署

取 材 内 容 : 2016年度の救急車の出動が10万件を超えたとの記事があったが、上越市の実態はどうなっているのかを取材。



○ 「上越市の労働事情」について

取 材 先 : 上越労働基準監督署・上越労働相談所

取 材 内 容 : 電通社員の過重労働による自殺の記事から、労働問題・雇用問題を大きな問題と捉え、上越の労働実態はどうなのかを取材。



○ 「癌」について

取 材 先 : 上越市の A 病院

取 材 内 容 : フリーアナウンサーの小林麻央さんが乳がん
で亡くなった記事から、上越市の癌発生率の実態を取材。



○ 「老老介護」について

取 材 先 : 上越市役所

取材内容 : 全国的に老人介護が社会問題となっているという記事から、上越市の実態どうなっているのかを取材。



○ 「豪雨災害」について

取 材 先 : 上越市役所

取 材 内 容 : 先日の豪雨で上越市でも避難勧告が出たが、実際にどのような被害があったのかを取材。



この実践をとおり、生徒たちは情報が溢れかえっている時代を生きる中で、得た情報を鵜呑みにするのではなく、本当にそれが正しいのかどうかを自分で動き、確かめることの大切さを学ぶとともに、得た情報に対し自分で動き、確かめることで、その情報が自分の中に確かな知識（情報）として取り込むことができたようである。

また、平成29年7月18日に実施した校内発表会に向け、各グループで取材したことを基にまとめの作業を行ったわけだが、その中で各々が自分の考えを述べ、それらをメンバーが認め合いながら作業を進める様子が見てとれた。

5 成果

わずか4ヶ月ほどの取り組みであったが、生徒たちにとって NIE に取り組んだことは非常に有益であったと考える。

この取り組みの後、このクラスの生徒たちは各人の進路実現を果たすべく受験に向かった。その中には推薦入試やAO入試に臨んだ生徒が15名ほどおり、志望理由書の作成から小論文や面接指導を行った。

毎年、これらの指導は、指導する立場からすると大変な部分がある。生徒の中に「自分が現在社会と結びついて生きており、今後もその結びつきの中で生きていく」という実感が希薄なため、「将来、社会に貢献するために次のステップがある」という観点に立った志望理由書や小論文・面接の応答になかなかならないということである。

しかし、このクラスの生徒は、NIE の経験が活きたのであろう、自らが進む進路と社会問題を関連づけ、自分が将来どう社会に貢献していくのかを明確に示した志望理由書をスムーズに書き上げることができた。

この他にも有益だった点はいくつもあるが、何よりもこの実践を行って良かったと思えることは、この実践をとおして生徒たちの内面的な成長を促せたということである。言うまでもなく、新聞に掲載されている記事は人間の営みがもたらした結果であり、私たちはその営みの中で生きている。生徒たちも同様である。その人間の営みがもたらした結果に興味関心を抱くようになることは、生徒たちの内面を大きく成長させ、今後彼らが社会を生き抜いていく力を養うことにつながると実感した。